AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2005.12) 6巻1号:33～42.

看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討

高岡哲子、留畑寿美江、服部ユカリ

旭川医科大学研究フォーラム 6(1) ：33～42，2005

投稿論文

看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討

高　岡　哲　子*　　留　畑　寿美江*　　服　部　ユカリ*

【要　　旨】

本研究の目的は、「高齢者疑似体験」における学生の高齢者観を明らかにし、教育プログラムの検討における基礎資料を得ることである。対象はH大学医学部看護学科の３年生で老年看護学と実践看護技術学（老年）を受講し「高齢者疑似体験」に参加した学生62名のうち、承諾が得られた61名であった。祖父母との同居経験がある者は全体の29.9％で、高齢者との生活経験が少ない傾向にあった。

データの分析は、Berelson, B.（1957）の方法で行い、高齢者疑似体験後の高齢者観のレポートから得られた素材は187文脈で、そのうちデータとして扱った高齢者観が記載されていた141記録単位からは、13の【カテゴリー】と、54の［サブカテゴリー（記録単位）］が抽出された。スコットの計算式により算出された一致率は83％で、信頼性は確保されていた。

この結果、本研究の対象は高齢者疑似体験後の高齢者観に、高齢者の【不自由である】状態を理解しながらも個体差に着目し、ネガティブな高齢者観とポジティブな高齢者観をバランスよく持ち合わせていた。また、高齢者疑似体験は、実施時期の検討だけではなく、導入内容が影響することが示唆された。

キーワード　高齢者疑似体験　高齢者観　看護学生　老年看護学教育

Ⅰ．研究目的

わが国は、世界有数の長寿国となり[1]、2000年には健康日本21が制定されるなど、生命の延長だけではなく生命の質をも重視する「健康寿命」という考え方が提唱されるようになってきた[2]。また、国民においても、加齢に伴う物忘れなどをポジティブに捉えた「老人力[3]」がベストセラーになったり、日野原重明氏によって設立された「新老人の会[4]」が注目されたりと、高齢者の持っているパワーに注目する考え方が広がりつつある。

しかし、高度経済成長期を境にした核家族化の進行により[1]高齢者と生活した経験のある若者が減少しており、看護学生においてもその例外ではない。また、マスコミなどで取り上げられる高齢者の情報は、詐欺の被害者だったり、孤独な死を迎えていたりとネガティブな内容が多い。このような状況から学生は高齢者に対して、マイナスイメージを持ちやすいと言われている[5]。老年看護学は、高齢者の健康や疾病・障害の状態や程度がどうであれ、高齢者自身が持っているパワー（生命力、英知、生きる技法など）を洞察し、自立への志向性を信頼し、支援することにおいて発想を転換する必要性を強調している[6]。つまり、学生が持つと思われる偏った高齢者観を、現実の豊かなものに広げられるように支援することが重要となる。

このような状況から、本研究の対象が所属する看護学科においても、老化による心身の変化と付き合いながら老年期を生きる高齢者の理解を、学生に深めてもらうために講義だけではなく、健康老人の話を聞くことや、デイサービスにおける施設見学、高齢者疑似体

*旭川医科大学　医学部看護学科

験などを取り入れている。その中の高齢者疑似体験とは、身体にプロテクターや錘、カラーゴーグルなどの装具を身につけることで、加齢による変化などを体験することであり、多くの教育機関において高齢者理解を深める目的で、教育プログラムに取り入れられている[5]。過去の「老年看護学教育」における、「高齢者疑似体験」に関する研究の焦点は、学習方法とその学習効果に当てられていた。そして、その文献のほとんどが学習効果があると結論付けていた。しかしその内容は、高齢者を肯定的に捉えることにつながったと述べている文献と[7]、逆に否定的な感情を抱くとした文献[5][8]とが見られた。成田[9]は「体験学習」の文献的考察を行い、「体験学習」の効果について明言されていないことを指摘し、同じく清水[5]も高齢者疑似体験に関する文献の分析を行い、「高齢者疑似体験」学習の客観的評価は十分されていないと述べている。つまり、どの文献も各教育現場においての実践報告の域を脱していず、その実施方法や学習効果については、実態調査研究の積み重ねが行われている現状にあり、教育カリキュラムには未だ検討の余地があるのではないかと考えた。

以上のことから学生が持つと思われる偏った高齢者観を、「高齢者疑似体験」学習を活用することでバランスの取れたものとし、高齢者理解を深めるための教育カリキュラムを構築するべく、本研究では、看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観を明らかにし、教育プログラムの検討における基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1．研究対象

Ｈ大学医学部看護学科の３年生で老年看護学と実践看護技術学（老年）を受講し「高齢者疑似体験」に参加した62名のうち、承諾が得られた学生が記載した、体験後の高齢者観のレポートである。

2．老年看護学に関するカリキュラム進度と高齢者疑似体験プログラムの内容

1）老年看護学に関するカリキュラム

老年看護学に関するカリキュラムの進度については、表１に示す。対象とした看護学科における、老年看護学に関するプログラムは、全て３学年目で行われる。「老年看護学」の履修内容は、表２に示す。履修時期は４月から８月までの間で、教授法は講義と学生

表１　老年看護学に関するカリキュラム進度（３学年）

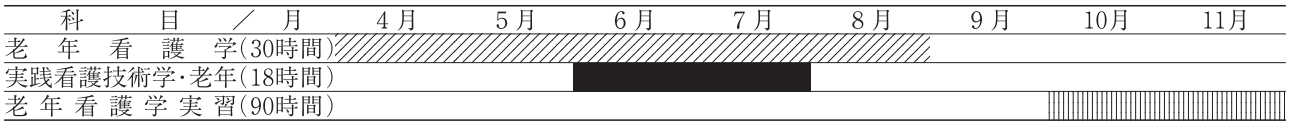

表２　老年看護学履修内容

コマ数	施 行 日	履　修　主　題	備　　考
1		老年看護学理念	老年看護の特徴と基本姿勢
２～３	４月18日	老化とは	身体的・生理的・心理的・発達段階・社会的側面から老化を理解する
４～５	４月18日・25日	高齢社会と、高齢者に対するサービス	高齢者を取り巻く状況
6	４月25日	高齢者の施設看護の役割	介護保険制度の理解
7	５月９日	高齢者の生活と人生	シルバー人材派遣センターに登録されている方のお話を聞く
８～14	５月９日	高齢者に特有な疾患と看護	各疾患の理解とその看護
15	・10日	脳、神経疾患の補助診断	
16～22	・16日	老年看護学の基本技術	各基本技術とその看護
	６月17日		実践看護技術学(老年)において高齢者疑似体験を実施する
23～24	６月27日	家族への援助	家族が抱える問題など
25	７月４日	高齢者のアセスメントとケアプラン	MDS. RAPs 活用
26～27	７月４日・11日	看護過程の展開	グループによる、ペーパーペーシェント
28～29	７月11日	高齢者の病院における看護の実際	高齢者専門病院の看護
30	８月22日	まとめ	老年看護の展望と全体の補足

のプレゼンテーションによって行われる。「実践看護技術学（老年）」は６月と７月に集中的に行われ、高齢者疑似体験、デイケア・デイサービス見学、高齢者の事例に基づいた技術演習を行っている。老年看護学実習は、10月・11月中に、１学生に対して３週間行われる。内訳は、介護老人保健施設（１週間）と高齢者中心の病棟（２週間）である。

２）高齢者疑似体験プログラム

高齢者疑似体験のプログラム内容は、表３に示す。実践看護技術学（老年）開始時、技術演習や見学実習とともに、高齢者疑似体験のガイダンスを行う。高齢者疑似体験のグループは、１グループ３名から４名で、26グループに分かれて３時間かけて行われる。使用される高齢者疑似体験セットは一般に販売されている物である。高齢者疑似体験を行う学生は、本研究対象者以外に10名の学部編入生も含まれている。しかし、学部編入生は老年看護学の講義を受けていないため対象からは除外する。

表３　高齢者疑似体験プログラム内容（学生配布資料）

実践看護技術学（老年看護学）　2005．6．

高齢者疑似体験実施資料

１．目　　的

装具をつけることにより、加齢による身体機能の変化を疑似的に体験し、高齢者の身体、心理的側面の理解を深め、より良い高齢者看護に役立てる。

２．方　　法

- 疑似体験グループ表にあわせてグループに分かれる。
- 全体でビデオを見て、装着法などを確認する。
- グループ内で２人１組になり交互に高齢者役と介助者役を体験する。
- 高齢者役は介助者役の介助を受けながら下記の課題を実施する。
- 高齢者役１人に与えられた時間は20分である。
- １人に与えられた時間内に装具装着、体験、着脱を行う。
- 全員が終了したら、元通りに物品を戻し、周囲の環境を整える。

３．課　　題

１）実施課題

①　階段を上り下りする。
②　和式の便器にしゃがむ。
③　洋式トイレに腰掛けてみる。
④　身体障がい者用トイレに腰掛けてみる。
⑤　自動販売機で好みの飲み物を買い、学生ラウンジで飲む。
⑥　お金かテレフオンカードを使い、公衆電話を利用して117番で時刻を聞いてメモする。
⑦　エレベーターを使う。
⑧　電話帳で旭川市役所の電話番号を探しメモする。
⑨　２階の学生用掲示板を見て、「疑似体験のお知らせ」をメモする。

２）レポート課題

課題１：以下の点について、どのように感じ、考察したのかを述べなさい。

①　身体的側面
②　心理的側面
③　全体を通しての学び

課題２：「高齢者疑似体験」学習を通して感じた、高齢者へのイメージを記載する。

＊Ａ４用紙１枚以上とし、表紙は不要で学籍番号と氏名を記載する。
提出場所：レポートボックス
提出期日：2005．6．

４．注意事項

- 介助者は、事故のないように慎重に介助する。（特に階段昇降）
- 大声を立てず､静かに行動する。特に、教室・教官の研究室には近づかない。
- やむを得ず近くに行く場合は、物音を立てない。
- 疑似体験セットは丁寧に扱い、破損しないようにする。
- 万が一破損した場合は速やかに申し出る。

3．データ収集場所と期間

データ収集場所は北海道内にあるＨ大学医学部看護学科で、データ収集期間は2005年６月である。

4．データの収集方法

1）高齢者疑似体験を実施したのち、どのような高齢者観を持ったのかと、その理由を記述してもらう。
2）分析に用いる学生の基本属性は、性別、年齢、高齢者との生活体験などである。

5．データの分析方法

本研究は、学生のレポートから高齢者観を明らかにすることを目的としている。つまり意味や思いを読み取るのではなく、そのレポートに何が書かれているかと言うことが重要となる。そこで「表明されたコミュニケーション内容」を研究対象としている Berelson, B.（稲葉他訳）[10] の内容分析の方法に基づいて行うことが妥当であると判断した。

その段階は以下のとおりである。分析手順の参考例を表４に示す。

① 対象の「疑似体験」レポートの文脈を整理し、素材とする。その素材には、便宜上連続番号と、ID番号をつける。
② 素材から、「高齢者観」に関するデータを抽出する。
③ 抽出されたデータを、要約し１文脈ごとに１記録単位とする。要約するのは類似性を明確にするためである。
④ 意味内容の類似性に従い分類し、［サブカテゴリー］、【カテゴリー】をそれぞれ抽出する。
⑤ 分類は老年看護学担当教員３名で討議して行う。その、一致数と不一致数をカウントする。
⑥ 内容の一致率は、スコットの計算式に基づいて算出し検討する。
⑦ 抽出された高齢者観を検討する。

6．倫理的配慮

本研究は、学習内容の一部を使用することと、事前に承諾書を取らないことで学生に与える心理的、身体的侵襲は極めて低いと考える。しかし研究者の所属機関でデータ収集を行うため、研究協力を拒否することで、学習上何らかの不利益をこうむるのではないかと懸念することも予測できる。そのため、この研究への参加を拒否しても評価にはまったく関係がないこと、また研究への参加を中断することにおいて不利益をこうむらないこと、さらにデータは機密保持のため ID をつけて匿名で処理し、厳重に保管・管理することを老年看護学と実践看護技術学（老年）のプログラムが全て終了した後に、集団に対して説明し個々に書面にて承諾を得る。

Ⅲ．結　　果

高齢者疑似体験前の老年看護学の講義、及び高齢者疑似体験に関するプログラムは予定通りに実施された。

1．対象の特性

本研究の対象は、Ｈ大学医学部看護学科の3年生で老年看護学と実践看護技術学（老年）を受講し「高齢者疑似体験」に参加した学生62名のうち、承諾が得られた61名であった。年齢は全員20代で、性別は女性が56名と男性が５名であった。祖父母との同居経験がある者は全体の29.9％で、本対象においても高齢者との生活経験が少ない傾向にあることが示された。

2．高齢者疑似体験における高齢者観

対象の高齢者疑似体験における高齢者観は表５に示す。

高齢者疑似体験の高齢者観に対するレポートから得られた素材は187文脈であった。そのうち、高齢者観が記載されていた141記録単位をデータとして扱った。スコットの計算式により算出された一致率は83％で、信頼性は確保されていた。

対象の高齢者観の内容分析の結果、13の【カテゴリー】と、54の［サブカテゴリー(記録単位)］が抽出された。以下カテゴリーを【　】で、サブカテコリーを［　］で示し、サブカテゴリー内に記録単位数を（　）で示す。

【不自由である】は、単に身体障がいを感じていることにとどまらず、日常生活に支障を来たしている、［不便な生活を送っている(25)］［身体が思い通りにならない(12)］［手助けが必要である(３)］［判断力が低下する(１)］の4つのサブカテコリーによって構成されていた。

【ネガティブな感情を持ちやすい】は、さまざまな出来事による感情のゆれや、漠然とした思いを表す、

表 4　分析手順の参考例

＊①～⑤は本文のデータ分析手順の番号と連動している。

No ①	ID ①	素　　材　①	文脈の整理　①	抽出・有無②	一致・不一致⑤	要　　約　③	サブカテゴリー④	カテゴリー④
19	6.1	「高齢者疑似体験」学習を通して感じた高齢者へのイメージは、体に錘とベルトをつけ、ぼんやりとした視界の中で不自由に生きている人、というものだった。このイメージは、私自身が装具を身につけた時に感じた自己のイメージである。	高齢者へのイメージは、体に錘とベルトをつけ、ぼんやりとした視界の中で不自由に生きている人、という自己のイメージである。	抽出	一致	体が重く、ぼんやりとした視界の中で不自由に生きている人である。	不便な生活を送っている	不自由である
163	52.3	体験を通して、高齢者は障がいを持っている人ではなく、わたしと同じなのだと思った。わたしと何の変わりもなく自分の生きている世界で一生懸命生きている存在なのだと思った。	高齢者は障がいを持っている人ではなく、私たちと同じで、自分の生きている世界で一生懸命に生きている存在なのだと思った。	抽出	一致	自分の世界で一生懸命に生きている。	自分なりに一生懸命である	一生懸命である
25	8.2	一日はゆっくり穏やかに過ぎていき、疲れやすく、休み休みマイペースに行動するイメージがある。	一日はゆっくりと穏やかに過ぎて、マイペースに行動する。	抽出	一致	ゆっくりと穏やかにマイペースに行動する。	生活の組み立てが出来る	自立している
117	38.3	“高齢者”と一言で言っても、近頃は私たち大学生よりも体力があったり、年齢層に見えない方も沢山いるが、それぞれが加齢に伴う個別的な変化を感じているというイメージに変わった。	高齢者と一言で言っても加齢に伴う個別的な変化を感じている。	抽出	一致	加齢に伴う個別的な変化がある。	加齢に伴う変化がある	個体差がある
155	51.4	今回の体験では、心理的にも変化を感じた。介助者の話している言葉が聞き取れなかったり、介助者が視界からいなくなったりすると、不安に感じることが多くなっていた。	介護者の話が聞き取れなかったり、介護者が視界に入らなかったりすると不安に感じることが多くなった。	抽出	一致	介護者を確認できないと、不安である。	不安がある	ネガティブな感情を持ちやすい
49	16.2	今まで感じていた弱々しいイメージではなく、高齢者は高齢者なりに身体的に辛いことが多く、またそこから精神的にも辛いことが多いなかで力強く生きていることが分かり、前とは逆に強いイメージを持った。	高齢者は身体的に辛いことが多く、そのことから精神的にも辛いことが多い中で力強く生きている。	抽出	一致	身体的・精神的に辛いことが多い中で、力強く生きている。	力強く生きる	生活能力がある

［不安がある(４)］［孤独感がある(６)］［身体変化に対する愚痴を言う(１)］［介助を受けると悔しい気持ちになる(１)］［行動を起こすことへの恐怖心がある(２)］の5つのサブカテコリーによって構成されていた。

【身体能力が低下している】は、感覚レベルである［行動では若者にかなわない(１)］［感覚機能が低下する(２)］［行動範囲が狭い(４)］［身体的負担が大きい(１)］［動作が緩慢である(４)］［身体運動の制限が大きい(１)］［外見が元気そうでも身体は低下している(１)］［情報を入手しづらい(１)］［身体的な問題を抱えている(１)］［疲労しやすい(９)］［喪失感を持つ(１)］［障がいがある(１)］の12のサブカテゴリーによって構成されていた。

【ストレスが大きい】は［元気そうでも多くのストレスを抱えている(１)］［自由が利かない(１)］［周囲から非難や中傷を受ける(１)］［心理的苦痛がある(２)］［生活をする上でのストレスがある(１)］の５つのサブカテゴリーによって構成されていた。

【焦燥感がある】は、［気持ちに余裕がない(１)］と［動作が緩慢でいらいらしている(２)］の２つのサブカテゴリーによって、【一生懸命である】は［自分なりに一生懸命である(２)］［がんばって生活をしている(２)］の２つのサブカテゴリーによって構成されていた。

【自立している】は、［それほど介助が必要ではない(１)］［生活の組み立てができる(３)］の２つのサブカテゴリーによって、【個体差がある】は、［一人ひとりさまざまである(８)］［気の持ち方で変化する(１)］［加齢に伴う変化がある(２)］の３つのサブカテゴリーによって構成されていた。

【生活能力がある】は、［最大限の能力を発揮している(１)］［潜在的な能力を持っている(１)］［自立心が強い(１)］［加齢では感情の変化はない(１)］［強く生きる(３)］の５つのサブカテゴリーによって構成されていた。

【積極的である】は、［元気に生活している(３)］［身体能力の低下があっても活動しようとする(１)］の２つのサブカテゴリーによって、【尊敬すべき人である】は、［楽しみ方を知っている(１)］［我慢強い(１)］［尊敬できる(１)］［人生経験がある(１)］［気遣いができる(１)］［豊かな人間性(３)］［精神的に強い(１)］の７つのサブカテゴリーによって構成されていた。

【謝意心がある】は、［親切をありがたく思う(１)］［感謝の気持ちを持っている(１)］の２つのサブカテゴリーによって、【適応能力がある】は、［身体変化と上手に付き合う(７)］［自分にあった趣味を楽しむ(１)］［環境に適応する(１)］の２つのサブカテゴリーによって構成されていた。

Ⅳ．考　　察

１．本対象の高齢者観の特徴

１）不自由である高齢者観

【不自由である】に含まれていた［不便な生活を送っている］の25記録単位と、［身体が思い通りにならない］の12記録単位は、他のサブカテゴリーと比較して記録単位数が多かった。シミュレーションのデメリットとして、野村[11]は“その用い方により「負の体験」に偏ると、加齢や健康障害が、欠損状態として意識される危険性があること”を指摘している。本研究において、高齢者疑似体験の課題項目は「和式の便器に座る」や「自動販売機で好みのジュースを買って飲む」など、生活に根ざした動作が多かった。つまり、何の障がいもない現在の自分の生活体験との比較がしやすかったことが予測できる。さらに、本体験は高齢者とは違い、疑似体験セットをつけた途端に不自由になるインパクトの強さもあった。よってこのように不自由さが表在化したのには、負の体験が強調されたことが誘引であるのではないかと考える。

２）ネガティブとポジティブな高齢者観

前述したように、ネガティブな高齢者観が際立ったように思われたが、本対象の疑似体験後の高齢者観のカテゴリーに着目すると、【不自由である】【ネガティブな感情を持ちやすい】【身体能力が低下している】【ストレスが大きい】【焦燥感がある】に見られるようにネガティブな高齢者観と、【一生懸命である】【自立している】【生活能力がある】【積極的である】【尊敬すべき人である】【謝意心がある】【適応能力がある】のように、ポジティブな高齢者観がバランスよく抽出されていた。この結果は、学生が高齢者に対してマイナスなイメージを持ちやすいといわれていること[5]や疑似体験においてネガティブな捉えをしがちである[8]という研究結果とは異なっていた。本研究において、高齢者疑似体験は、老年看護学講義の22コマ目が終了し

表５　対象の疑似体験後の高齢者観

カテゴリー	サブカテゴリー	記録単位数
不自由である	不便な生活を送っている	25
	身体が思い通りにならない	12
	手助けが必要である	3
	判断力が低下する	1
ネガティブな感情を持ちやすい	不安がある	4
	孤独感がある	6
	身体変化に対する愚痴を言う	1
	介助を受けると悔しい気持ちになる	1
	行動を起こすことへの恐怖心がある	2
身体能力が低下している	行動では若者にかなわない	1
	各感覚器機能が低下する	2
	行動範囲が狭い	4
	身体的負担が大きい	1
	動作が緩慢である	4
	身体運動の制限が大きい	1
	外見が元気そうでも身体は低下している	1
	情報を入手しづらい	1
	身体的な問題を抱えている	1
	疲労しやすい	9
	喪失感を持つ	1
	障がいがある	1
ストレスが大きい	元気そうでも多くのストレスを抱えている	1
	自由が利かない	1
	周囲から非難や中傷を受ける	1
	心理的苦痛がある	2
	生活をする上でのストレスがある	1
焦燥感がある	気持ちに余裕がない	1
	動作が緩慢でいらいらしている	2
一生懸命である	自分なりに一生懸命である	2
	がんばって生活をしている	2
自立している	それほど介助が必要ではない	1
	生活の組み立てが出来る	3
個体差がある	一人ひとりさまざまである	8
	気の持ち方で変化する	1
	加齢に伴う変化がある	2
生活能力がある	最大限の能力を発揮している	1
	潜在的な能力を持っている	1
	自立心が強い	1
	加齢では感情の変化はない	1
	力強く生きる	3
積極的である	元気に生活している	3
	身体能力の低下があっても活動しようとする	1
尊敬すべき人である	楽しみ方を知っている	1
	我慢強い	1
	尊敬できる	1
	人生経験がある	1
	気遣いができる	1
	豊かな人間性	3
	精神的に強い	1
謝意心がある	親切をありがたく思う	1
	感謝の気持ちを持っている	1
適応能力がある	身体変化と上手に付き合う	7
	自分にあった趣味を楽しむ	1
	環境に適応する	1

た時点で行われた。この時期はさまざまな側面から老化を理解し、高齢者を取り巻く社会に関する学習も終了していた。また、高齢者の生活と人生を考えるために、シルバー人材センターで実際に仕事をされている高齢者２名の話を聞いた後でもあった。つまり、対象は高齢者が加齢に伴い変化するという共通性はあっても、その変化には多様性があることを理解していた。そのため【不自由である】や【身体能力が低下している】状態であっても【一生懸命である】に含まれていた［自分なりに一生懸命である］や［がんばって生活している］などのポジティブな高齢者観へと結びついたのではないかと考える。つまり高齢者疑似体験によって得られた高齢者観は、対象がどのような知識を持ち、どのような経験をしてきたかが影響していることになる。よって、対象にとって老年看護学の講義が、バランスのよい高齢者観を得るための、導入の役割を果たすことになったのではないかと考える。

３）個体差がある高齢者観

【個体差がある】と言うカテゴリーのほかに、【一生懸命である】に含まれた［自分なりに一生懸命である］や【適応能力がある】に含まれていた［自分にあった趣味を楽しむ］などにみられるように、本研究においては高齢者の個体差に着目した高齢者観が多く見られた。これは、老年看護学の講義において、高齢者の特徴として「個体差がある」ことを強調した教授の効果であると考える。特に、日本は世界有数の長寿国であり、高齢者と一言で言っても65歳から100歳以上までの開きがある。これは、大田[12]が“かつて有史にないほどの長命を受けた平成の老人の個人差が、かつてないほど大きいであろうことは想像に難くない”と述べているように長寿国日本だからこそいっそう、この個体差があることを念頭に入れて看護を行う必要がある。よって、本対象においては、高齢者看護の重要な要素が身につきつつあることが示唆された。

２．カリキュラムへの提言

１）個体差への着目

本研究結果から考えると、【不自由である】に含まれていた［不便な生活を送っている］と［身体が思い通りにならない］が強調された傾向を示したものの、全体的にはネガティブな高齢者観と同様に、ポジティブな高齢者観がバランスよく見られていた。「研究目的」でも述べたように、高齢者看護を行うにあたっては“老年者の健康や疾病・障害の状態や程度がどうあれ、老年者自身が持っているパワーを洞察し、自立への志向性を信頼し、支援すること・・・[6]。”が重要である。つまり、バランスのよい高齢者観を持つということは、エイジングの多様性に対応するために必要な視点を持ち合わせていることになる。

しかし本研究において、ネガティブに傾きやすいといわれている高齢者疑似体験で[8]これだけのバランスを保ったということは、逆にその後に予定されている見学実習において、何らかの疾病や障がいがあっても生き生きと生活されている高齢者と直接接することで、さらにポジティブな高齢者観を強めることが予測される。つまり、今後実習などで虚弱な高齢者に対して看護を提供する際に、過度の期待や自立を促すかかわりを強いることにもなりかねない。しかし本研究の対象は、高齢者の個体差に着目することが出来ていた。これは高齢者を個別に見る視点を持っていることにつながるものと考える。よって、ポジティブな高齢者観を深めやすいと思われる、デイケア・デイサービスの見学実習においても、高齢者に個体差があることを強調していく必要がある。さらに、対象が持った高齢者観を自ら整理し、統合できるようにサポートしていく必要もあると考える。

２）実施後のディスカッションとボランティアの導入

体験学習にとって最も大切なのは“気づき”であると犬塚は述べている[13]。このことから考えると、本研究によって行われた高齢者疑似体験において対象は、高齢者観を記述したことでそれに見合う気づきが得られたものと予測する。しかし、成田ら[9]は「体験学習」の効果が持続されないことを指摘している。つまり、今回得られた高齢者観を持続するためには、何らかの方策が必要となる。清水ら[5]は“体験を強化するためには体験学習直後の討論時間が必要であり、教師は学生が体験の振り返りを行うプロセスを見直して、その場で生起したことやその意味を考えられるようにかかわることが大切である”と述べている。そのため、体験終了後にディスカッションを用いることで、気づきの強化を行うことが効果的ではないかと考える。また、実習までの数ヶ月の間にボランティアなどを導入し、高齢者と直接触れ合う機会を設けるなどの工夫が必要となるのではないかと考えた。ただしボランティアは

“自ら進んで社会事業などに無償で参加する人[14)]”のことをさす。そのため、老年看護学のカリキュラムに含むと、本来のボランティアの意味である自主性が損なわれる危険性がある。ボランティアのカリキュラムへの導入は小・中学校の総合学習においても、いまだ議論が繰り広げられている現状がある。そのためボランティアなどで、高齢者と接することが大切であるという動機付けを行うことは可能であるが、カリキュラムへの導入にいたってはさらに検討が必要であると考える。

今回、学生がバランスの良い、高齢者観を得ていることが確認された。しかし、これが実際の看護でどのように生かされているかについては、今後も実態を調査することが必要である。また、高齢者疑似体験のほかにも、高齢者観を育成するための学習方法は多く活用されている。これらによって、学生がどのような高齢者観を持つのかの検討も、今後行う必要があると考える。

Ⅴ．結　　論

- 本研究の対象は高齢者疑似体験後の高齢者観に、高齢者の【不自由である】状態を理解しながらも個体差に着目し、ネガティブな高齢者観とポジティブな高齢者観をバランスよく持ち合わせていた。
- 高齢者疑似体験により得られた高齢者観は、実施時期の検討だけではなく、導入にどのようなことが行われていたかが影響することが示唆された。

文　　献

1）厚生統計協会：国民衛生の動向，50(9)，2003
2）厚生省：厚生白書（平成12年度版）新しい高齢者像を求めて ―21世紀の高齢社会を迎えるにあたって― ぎょうせい，2000
3）赤瀬川源平：老人力，筑摩書房，東京，1999
4）日野原重明：「新老人」を生きる，光文社，東京，2001
5）清水初子・水戸美津子・流石ゆり子：老年看護学における教育方法としての体験学習 ―「高齢者疑似体験」学習に関する文献分析から―，山梨県立看護大学紀要，2(1)，73-85，2000
6）中島紀恵子：系統看護学講座　専門20　老年看護学，医学書院，東京，2004
7）古城幸子・木下香織：老年看護学で取り上げた高齢者援助技術演習の効果，ナースエデュケーション，14(2)，19-27，2003
8）深澤圭子・横溝輝美：老年看護学における高齢者疑似体験学習の効果の検討 ～５年間のまとめ～，北海道看護教育研究会会報，32，30-38，2004
9）成田　伸・石井トク：特集　体験学習［排泄］への疑問　授業研究「体験学習」の文献的考察，看護教育，34(2)，91-100，1993
10）Berelson，B.（稲葉三千男他訳）：内容分析，みすず書房，東京，1957
11）野村明美：第２章　シミュレーション，藤岡完治，野村明美(編)：わかる授業を作る看護技術教育技法３シミュレーション・体験学習，83-107，医学書院，東京，2000
12）大田仁史：特集　新しい高齢者観と保健婦活動　平成の老人観，保健婦雑誌，53(6)，438-441，1997
13）犬塚久美子：第４章　シミュレーション，藤岡完治，野村明美(編)：わかる授業を作る看護技術教育技法３シミュレーション・体験学習，133-144，医学書院，東京，2000
14）新村　出(編)：広辞苑　第５版，岩波書店，東京，1999

旭川医科大学研究フォーラム 6(1) ：33～42，2005

An examination of the nursing student's outlook toward the elderly and the education program after "simulating the experience being elderly"

TAKAOKA Tetsuko*, and TOMEHATA Sumie*, and HATTORI Yukari*

Summary

The purpose of this study is to clarify the outlook toward the elderly which nursing students derive from the "simulating the experience being elderly" program, and utilize it as basic data for examining educational programs.

The subjects comprised 61 students in their third year of a four-year nursing college. They agreed to cooperate in this study, and participated in the "simulating the experience being elderly". Only 29.9% of them had experience of living with grandparents.

The data was analyzed using the method of Berelson, B. (1957). We obtained 187 items from reports on the outlook toward the elderly, which the subjects described after simulating the experience of being elderly. The recorded 141 units out of those concerning the outlook toward the elderly were used as data, and 13 "categories" and 54 "subcategories" were extracted. The correspondence rate, calculated using Scott's method, was 83%, showing a high level of reliability.

The results revealed that though the subjects understood the "inconvenience" of being elderly, students were also aware of individual differences, and showed a balance of negative and positive outlooks toward the elderly. The results suggested that the timing for conducting this simulation as well as its content influences the effects.

Key words simulating the experience being elderly, outlook toward the elderly, nursing students, gerontological nursing education

*Asahikawa Medical College, Department of Nursing